よびごえ

因速寺機関誌

VOL, 118

地下鉄での話。私が乗った次の駅で、老人が乗ってきた。私は咄嗟に自席を譲ろうと、「座りませんか」と声をかけた。すると、その方は「あなたと同じくらいじゃないですか」とニヤッとして応えた。同じような老人が、老人に向かって席を譲るなど、ちゃんちゃらおかしいんじゃないの！お前！自分では若いと思ってるようだが、もう立派な老人だぜという意味だ。それを見て隣席の後輩が立ち上がり、老人に席を譲った。隣に腰を下ろした老人に、私は「干支は何ですか？」と聞いた。すると、「午ですよ」と応える。私は内心、ギクッとした。実は私も午だからだ。しかし、同い年の午ではない、ひと回り違っているはずだと思ったが、もう「何年生まれですか？」と質問するのはやめた。万が一、同い年の午だったら目も当てられない。私から見ると、そのひとは、明らかに白髪の老人だ。しかし、その方から見ると、私も老人に見えたらしい。私は、すかさず「世間」を味方につけた。「世間的に見て、彼のほうが老人だよな」と。『大無量寿経』には「老・病・死を見て世の無常を悟る」とある。これは人間の「思い」が、永遠に、決して受け止められない三つの問題だ。これらは、人間の「思い」を打ち破る形で、必ず阿弥陀さんと共に立ち現れる。

母音は阿弥陀さん

武田　釋定光（住職）

■子音を伸ばすと母音に行き着く■

私たち人間は、言葉を話す。言葉は、母音と子音の組み合わせで、初めて言葉となって、口から生まれる。

それは「愛してます」にしろ、「この馬鹿野郎！」にしろ、「まさか、こんな目に遭うなんて」にしろ、あらゆる言葉は、母音と子音が組み合わされないと言葉にならない。

そんなことを考えていたとき、ふと、「母音は阿弥陀さんだなぁ」と直感した。

母音無しに「愛してます」と発音することはできない。「あい」だけは母音だから発せられても、「してます」は無理だ。「してます」の母音を取り出せば、「い・え・あ・う」となる。つまり、「愛してます」は「あ・い・い・え・あ・う」となり、何を言っているのか意味をなさない。

「この馬鹿野郎！」は「お・お・あ・あ・あ・お・う」だ。これなら、喧嘩にもならないだろう。子音は、攻撃的だが、母音は平和へと導く。

母音無しに、言葉が成り立たないように、阿弥陀さん無しに言葉は成り立たない。

でも、不思議なことで、子音をそのまま引っ張って発音してみると、すべては母音に飲み込まれてしまう。「この馬鹿野郎！」も、長く引っ張って発音してみると、「こ→お、の→お、ば→あ、か→あ、や→あ、ろ→お、う→う」となってしまう。短期間に発音すると、意味をなすが、それを長く引っ張って発音してみると、すべては母音に飲み込まれてしまう。

やはり、そう思うと、言葉は阿弥陀さんに行き着いてしまうのか。だから、阿弥陀さんを抜きにして、言葉を発することはできないのだ。言葉を発するときには、必ず、阿弥陀さんの支えがあってのことなのだ。

■何に向かって言葉を発するのか■

自分は何に向かって、そして誰に向かって言葉を発しているのだろう。山登りをしていて、ヤッホーッと叫んでみる。すると、向こうの山の方でヤッホーッと谺が帰ってくる。山に向かって大声を出すと、山はそれを返してくれる。

私たちの日常では、言葉は誰かに向かって発するものだ。言葉を発すると、それに対して、普通は応答がある。コンビニの店員ならば、ドアを開けて入ってきたお客に対して、「いらっしゃいませ！」と大声を投げかける。まあ、お客は、それに対していちいち反応しない。無視しているわけではないのだが、店員も、お客の反応を期待してはいないだろうと思っているから、聞き流しておく。むしろ、店員の挨拶に、「いえいえ、こちらこそ、お邪魔します」、などと客は反応しないし、おそらく反応されたら店員もドン引きするのではないか。

そんなことを考えていたら、法事のとき、私は誰に向かって読経しているのだろうかと、ふと思った。法事は、大声で読経することになっている。それは、果たして亡くなった故人に対してか、それとも参詣人に対してか、はたまた、中央に立っている阿弥陀さんに対してか。そのタ

ーゲットが定まらない。

三つすべてがターゲットであるような、はたまた、どれでもないような気もする。世間の宗教は、「故人」がターゲットかもしれない。しかし、親鸞は、違う。親鸞は、その三者をターゲットにしていないのではないか。つまり、「誰かの為」という意識はないのではないか。

■「〇〇のため」ではない■

蓮如の言葉を思い出した。

「蓮如上人（れんにょしょうにん）、仰せられ候う。『信のうえは、とうとく思いて申す念仏も、また、ふと申す念仏も、仏恩に備わるなり。他宗には、親のため、また、何のため、なんどとて、念仏をつかうなり。（親鸞）聖人の御流には、弥陀をたのむが念仏なり。そのうえの称名は、なにともあれ、仏恩になるものなり』と、仰せられ候う云々」（『蓮如上人御一代記聞書』聖典∞86頁）

蓮如は、「親のため、また、何のため、なんどとて、念仏をつかうなり。聖人の御流には、弥陀をたのむが念仏なり」と言う。つまり、蓮如の意識の中では、親のためとか、何かのためにナンマンダブツと称えるわけではないという。ただ「弥陀をたのむが念仏なり」が、よく分からない。「〇〇のため」と「弥陀をたのむ」が、蓮如の意識の中でどう異なっているのかが問題だ。

しかし、その手がかりは、前文にある。「とうとく思いて申す念仏も、また、ふと申す念仏も、仏恩に備わるなり」だ。どんなことを思っていようとも、何をしていてもだ。欠伸（あくび）と一緒に出るナンマンダブツも、習（なら）い性（しょう）になっていて出るナンマンダブツも、意識して発語したナンマンダブツも、それはすべて「仏恩に備わる」ことになるらしい。それは「阿弥陀さんの御恩に報いることになる」という意味だろう。

もっと言えば、人間が「これは〇〇のため」と意識したナンマンダブツは、すべて間違っているということだろう。だからといって、無意識で出たナンマンダブツとか、トランス状態で出たものが本物だというわけでもない。逆に「〇〇のため」という意識をすべて飲み尽くしていくような力がナンマンダブツではないか。

野田明薫師の**「ひと声も、役に立たさぬ嬉しさに、称えてはみつ、みては称えつ」**、というのが〈ほんとう〉のことだろう。それは、ナンマンダブツという些細な発語だけではなく、その発語は、人間が生きるという全生活を包み込むような意味をもっている。

つまり、人間が「何のために言葉を発しているのか」という問いは、「何のために生きているのか」という問いと同質だったのだ。

■宇宙に向かって生きよ■

いま原稿を書いているときは、蝋梅（ろうばい）が馥郁（ふくいく）とした香りを放っている。これが発行されるお彼岸には、沈丁花（じんちょうげ）が、咽（むせ）ぶような香りを放つ。誰かのために咲いているのでも、香っているのでもない。これが〈ほんとう〉のナンマンダブツの姿だろう。

花が「お前を喜ばせるために、咲いているのだ」とでもしゃべったら、人間は花を愛することはできない。花は、誰かのためという意識は毛頭（もうとう）ないはずだ。だからこそ、人間を癒し、感動させる。これこそが阿弥陀さんの徳を象徴している。

母音は、誰かのためとは言わない。ただだまって、子音の影に隠れている。これこそが作為無き悲愛の姿ではないか。蓮如は、人間に向かって「花となれ」と言っているようだ。花が空に、さらに宇宙に向かって咲き誇るように、人間も宇宙という無限に向かって生きよと言うのだ。

浄土真宗のふところ

鈴木　里恵（ベトナム）

以前、定光さんから「浄土真宗が盛んな北陸の方では、僧があげる正信偈に合わせて檀家さん達も唱和するから感激するよ」という話を聞き、“かっこいい！私も正信偈を唱和できるようになりたい”と思い、毎朝、正信偈のCDをかけて唱えていた時期がありました。

唱えるからには内容をきちんと理解しなくては意味が無いと思い、因速寺でいただいた正信偈の訳が書かれているプリントを見ながら唱えたり、時には日本語訳の方を唱えたりしていました。

日本語訳には素敵な文がちりばめられています。

“信心を起こせば、自分を超えた自己・自分を超えた世界に感動し、自然に苦しみの循環の輪を抜け出せるのです。”“仏の愛に目を開けば、仏さまは、そのひとを大の親友とほめ、また可憐な蓮華のようなひとといわれるのです。”

その当時の私は、朝から素晴らしい言葉を唱えて、可憐な蓮華のような仏弟子気分になったものです。

時には、「七高僧と言われる人達は、私のような凡夫を仏の愛の世界にいざなうためにがんばってくださったんだな～。ありがたいな～。」と感激して涙したこともあります。

朝から発声練習しているようなものなのでしょう。カラオケが上手になったのは副産物でした。

しかし次第に、正信偈の内容と自分の本心が一致していないことに気付きはじめ、正信偈を唱えることが自分に嘘をついているように感じられ、苦しくなってきました。

“ただ(仏と取引する心を捨てて)南無阿弥陀仏を称えさせてもらい、愛の尊さに応える生活を始めましょう”と正信偈にありますが、「そもそも“南無阿弥陀仏“の意味がわからない。意味が分からないものを喜んで唱えることはできないし、唱えるとしたらそれは偽善なんじゃないか。」という疑念が湧いてきたのです。

しばらくして私は正信偈をあげる生活をやめてしまいました。

§　§　§

そんな私を仏さまがほっておくことはありません。

去年十一月、母が亡くなり、久しぶりに定光さんとお話しする機会があり、「正信偈をあげるのが辛くなった」、この経験をお話ししたところ、“言葉の意味を考えながら正信偈をあげないで、最初は、漢字を読む段階から始まり、次は、暗唱段階に入り、次は、文字を離れて、音の世界をただ味わう段階に入ります。そうすることで意識段階から、無意識段階に近づきます。正信偈の読経は、無意識を養育してくれます。経文が、自分に身体化されれば、経文自体が、そのひと自身を養育してくれます。”と教えてくださったんです。

ハッキリいって教えていただいた内容は、なんのこっちゃかよくわからないんですが、定光さんの“何にも考えないで、ただあげればいいんだよ。”という言葉が衝撃的かつ、私を楽にしてくれました。それまで考えすぎて疑念だらけだった私は、「言葉の意味とか偽善とか関係ない。何にも考えないで、ただあげればいいんだ。」と合点してすごくホッとしたんです。

信頼する定光さんから発された言葉だったから響いたのでしょう。本当に浄土真宗の世界は、簡単なことが難しい…。

§§　§§　§§

どうして私は、正信偈や南無阿弥陀仏に意味を求め、南無阿弥陀仏を唱えることに疑念を抱くようになったのでしょうか。

最近の書店には「成功する人の一〇個の思考パターン」や「有意義な老後を過ごすためには」等の啓発本が並び、「今日より素晴らしい明日、より良い人生を送るために“何をするか”“効率的なやり方は何か”」という考え方が奨励されています。「失敗しないように事前準備をしっかりしよう。成功を求めて先を、先を、もっともっと。」そんな考え方に、きっと私は洗脳されているのでしょう。

しかし、浄土真宗はソコを突いてくれます。

「明日が来ることを当たり前だと思っている？」「より良い人生？今のあなたは良くないの？」

「世の中の風潮に流されていない？資本主義に洗脳されていない？」

当たり前が当たり前じゃない世界を浄土真宗は教えてくれます。

§§　§§　§§

“三宝(仏・法・僧)を敬え”と先人が言っていた事も理解できました。疑いのカタマリである私は、僧である定光さんから教えを受けたり、浄土真宗関連の本や「住職のつぶやき(因速寺のホームページ)」を読んで自分を法に照らす(法灯明)ことで、自分の煩悩から発生する苦しみを客観的に知ることができるのです。

皆さんは、よろこんで“南無阿弥陀仏”と言えていますか？

私は“NO”です。

こんな事を「よびごえ」に書いてしまう私に定光さんは原稿を依頼し、因速寺に喜んでむかえ入れてくださいます。

浄土真宗では、“喜んで南無阿弥陀仏と言う”ことが良いことか悪いことかが問題なのではなく、“喜んで南無阿弥陀仏と言えない私”を見つめることが重要と思われているからではないでしょうか。

まあ御開祖自ら、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」って言っちゃってますし…。

ほんとうにふところの深い宗派ですね。

§§　§§　§§

こんな私が因速寺さんとご縁をいただけているのもご先祖様のおかげです。また、今回、定光さんとお話しする機縁を頂いた事は、亡くなった母の置き土産かな～とも思っています。

四十九日法要で因速寺さんに行くことが今から楽しみです。訪問を楽しみにされるお寺って現在の日本において、そうそう無いと思いますよ。因速寺の皆様のご尽力の賜物ですね。これからもお世話になります。

南無。(↑言ってる！)

■里枝ちゃんとは、ずいぶん長いお付き合いです。以前はBサロンの常連でしたが、現在は、お連れ合いの仕事の都合でベトナムに住んでいます。この度、お母さんがお亡くなりになり、久しぶりにお会いし、原稿をお願いしました。南無阿弥陀仏は、ウナギを喰って美味かった！というのと似てます。ウナギを喰ったから、「美味かった！」という声が出るのです。まあ出るか出ないかは、どちらでもよいのです。まずウナギを食うことが先決です。ウナギとは〈真実〉の譬喩です。〈真実〉の味わいは、無限です。真宗門徒はこの〈真実〉を喰って

生のエネルギーにしてきました。例えば、「結婚とは別れを約束する儀式である」という言葉は、〈真実〉を語っています。出会うことが、別れの根本原因ですから。「死ぬ原因は誕生である」。これも〈真実〉の言葉です。死ぬ条件は、病気・老化・事故等ですが、原因は「誕生」です。ですから、生まれた赤ちゃんに、「お誕生おめでとう」とも言いますが、「この度は御愁傷様でした」と言うのも〈真実〉なのです。まあ〈真実〉は劇薬ですから、普通のひとが聞けば、目を背けたくなります。ただ、一度でも〈真実〉の味を知ったひとは、知らなかった自分に二度と戻ることができません。「私たちは死ぬために生まれてきたのです」。これも〈真実〉の言葉です。さあ、それに納得できますか。それに納得できれば、何も問題はありません。ところが、それに納得できない自分を発見するのです。〈真実〉に承服できない、つまり〈真実〉に背く自分です。この「背く自分」がまた、大切な〈真実〉からの賜り物です。北陸の真宗門徒の挨拶は、「喜ばれるけ?」、「なあん、喜ばれんがや」だったそうです。北陸弁が、何ともいえずウットリさせます。道で人に会ったとき、「こんにちは」ではなく、「喜ばれるけ?」と声をかけ、それに対して、「なあん、喜ばれんがや」と応答したのです。「喜ばれるけ?」とは、仏法を喜んで生活していますか?という意味です。また、それに対して、「なあん、喜ばれんがや」は、何も喜ぶことはできませんよと答えています。これは逆説的な応答で、「喜ばれんがや」と言って、仏法を喜んでいる表現です。喜べるようになって、喜ぶのではありません。逆に、喜ばれないからこそ、阿弥陀さんがはたらいて、私を喜べるようにして下さるのだから、これほど有難いことはないという信仰告白です。真実は常に逆説的です。

住職

母

飯塚　久恵(川崎市)

私の携帯電話には、私ですら一瞬ギョッとするような母のやせ細っていく姿の写真や動画が残されています。生き切った母の最期の姿はまるで骸骨のようでした。

息を引き取る前の二日間は添い寝をし、母が好きだった曲を聞いて暮らしました。もう早く逝かせてあげたいと思っていたのに、もう少し一緒にいたいという思いが溢れてきました。

アルツハイマーを発症して十年。最後は管も、酸素吸入も無く、老人ホームで老衰という大往生でした。

悲しみというよりは、ただただ淋しかった。

父をホームに預けてから、母と暮らしたのは五年間。日々認知症が進み、いつの頃からか母と私の立場が逆転し、母は私の後追いをするようになり、いざ私が助言をすると、プライドからか否定ばかりするようになっていきました。依存と否定の繰り返しで、私は精神的に追い詰められ、母の足音が聞こえるだけで、ぞっとした事も。

真宗では、人間関係のストレスを「煩悩(ぼんのう)」といただき、煩悩は対立す

る人間のどちらかに存在するものではなく、むしろ両者の「あいだ」に存在するものであると。その煩悩も、自分でコントロールできない。なぜなら、「あいだ」が引き起こすものだから。その煩悩を、再び自分を教育する教えとしていただく。

両者のどちらかが居なくなるということは、「あいだ」が無くなることで、逆に「教え」によって教育されることが少なくなると、ご住職に伺いました。

無くなってしまった母との「あいだ」。それは私を強くし、優しくし、育ててくれたのだと。それにしても、あんなに翻弄された「あいだ」が無くなるという事が、こんなにも淋しいなんて。

母は私が小学生の頃から、手作りパンや料理の教室に通いだし、料理講師になりました。あの時代、焼きたてのパンや、全て手作りの料理を食べていた家庭は、そうはなかったと思います。寝る間を削って、試作やレシピ作りをし、合間に油絵の教室にも通い、畳二畳もあるキャンバスに描き、個展も開いていました。本当にエネルギッシュで勉強家な母が、どんなに誇らしかったか。

葬儀の時、従姉妹が母に、「おばちゃん、ご馳走さまでした」と言っているのを聞いて、親しい人の中で母の手料理を食べていない人はいないことに改めて気付かされました。

私は母からたくさんのレシピを貰い、教わり、家族や友達が「美味しい！」と食べてくれている。周りの人を幸せにする術(すべ)を、気づかぬ間に母から受け継ぎ、そして私も十五年間、料理講師として、たくさんの生徒に幸せの味を伝えました。

きっと母の味は、枝分かれし、数え切れない人達へと伝わって行くことでしょう。

今、母に伝えたい事。

活気に満ちた生き様をみせてくれて、荘厳な逝き様をみせてくれて、そして、最後まで看させてくれて、ありがとう。

■里恵ちゃんのお姉さんが久恵ちゃんです。この度、お母さんを亡くされ、お二人に原稿をお願いしました。やはり、「一人一世界」だとつくづく教えられました。母・恵似子さんは、物理的には一人の存在でも、二人にとっては、それぞれに母像が異なっています。ということは、三人子どもがいれば、三通りの母が存在していることになります。恵似子さんには、生前、拙寺の世話人もしていただいた時期がありました。いつもアグレッシブで、芸術的で、義を貫き通す姿は、凛としておられました。そもそも親子は、望んで作れる関係ではありません。人体としては、遺伝子を受け継ぐほどに近しい存在であっても、この世に存在してみれば別個の生命体です。お互いの煩悩が許容する範囲で「親子関係」が成立していれば幸せでしょうが、許容できない関係もあります。いわば「遠慮のない関係」が親子ですから、煩悩が剥き出しにぶつかり合う関係です。煩悩が、思ってもみないような酷い言葉も吐き出させ、相手を傷つけます。それはまさに煩悩に狂わされた状態です。この狂気の関係を通して、それだからこそ、阿弥陀さんという仲人が要求されます。お経に、「独生(どくしょう)・独死(どくし)・独去(どっこ)・独来(どくらい)」とあるように、これが人間の〈ほんとう〉の姿です。文章の最後に「ありがとう」とありますが、このように言わせた力の背景に阿弥陀さんがあるのだと感じました。住職

永代経法要

兼ご命日の集い

―人間を考える集い―

5月13日(日)11時より厳修（受付10時半）

前座　住職法話＋お斎
後座　お勤め（勤行）＋法話＋落語＋宴
講師　高柳　正裕　師（元東本願寺教学研究所所員）
落語　古今亭菊志ん師匠（真打）

冥加志　お一人　三千円
（懇親会参加費一千円）

護法会費　値上げのお願い

因速寺・門徒の皆様におかれましては、日頃から因速寺興隆並びに、真宗繁昌にご協力下さり、甚深なる感謝を申し上げます。

さて、この度は、大変心苦しいことですが、護法会費の値上げをお願い申し上げることになりました。事情を申し上げますと、現代の少子高齢化に伴い、お墓を継承される方が減少し、いわゆる「墓じまい」のご相談が圧倒的に増えてまいりました。またそのような煽りを受けて、葬儀数も減少し、「家族葬」や「一日葬」、あるいは「直葬」で、葬儀をせずに焼骨されるケースも増えてまいりました。寺院減少傾向から、毎年、宗門（真宗大谷派）へ納める「宗門護持金」も増額傾向にあり、いままでの会費額での運営が難しくなってまいりました。

具体的には、会費の値上げは、十八年ぶりのことですが、会員様一軒・二千円のベースアップをお願いしなければならなくなりました。つまり、現行、年額・八千円の方は一万円の会費額になります。年額・一万円の方は一万二千円になります。

実際には、来年・二〇一九年(平成31年)よりの値上げとさせて頂きます。会費は強制ではございません。あくまでご懇念として頂いております。様々な事情で会費が納められないという方もありましょう。その場合には、その旨、ご連絡をいただけると幸いです。何卒、趣旨をお汲み取り下さり、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。合掌

因速寺護法会役員一同
因速寺住職武田定光　拝

★因速寺　掲示板★

◇ご命日の集い◇

門徒・檀家で有る無し不問です

毎月のご命日のかたを縁として仏法を聴聞する集いです。
やがて私自身も、この世を去っていきます。
みすみす死ぬのになぜ生きるのか？
人間の根源的な問いに、あなたならどう答えますか？

開催日：四月二十二日（日）五月十三日（日）兼永代経
内　容：読経（焼香）＋法話（住職）
冥加志：お一人 五百円

◇ブッディ・サロン◇
【輪読会】

門徒・檀家で有る無し不問です

一冊の本をみんなで輪読した後、お酒と肴と仏法を味わいながら、語らう会です。参加される皆さんは職種も様々、住所も様々、なにも強制されることはありません。様々な本を通してそこに流れている〈ほんとう〉に触れるのが会の趣旨です。
どうぞご参加下さい。どなたでも参加可能です。

●下半期の開催日　午後四時スタート
●冥加志：お一人 千円　※遅刻・早退自由です♪
●日　程：三月二十五日（日）四月二十二日（日）
五月はお休み　六月二十四日（日）

◆写経の会◆

門徒・檀家で有る無し不問です

毎月一回 午後一時三〇分～四時頃まで（お勤め＋座談含む）
開催日：三月十四日（水）四月十八日（水）
五月二十三日（水）六月十三日（水）
教　材：正信偈、仏説阿弥陀経、仏説無量寿経
一時間程写経に集中し、その後は本堂で勤行（おつとめ）をします。
お菓子とお茶を飲みながら車座になり座談をする会です。写経のみの参加でも構いません。非日常を味わってみませんか？
どなたでも参加可能です。
研修冥加金：初回は三千円（教材費込）
二回目以降五百円

❤お寺でゆったり朝ヨガ教室❤

朝の光が差し込む本堂で、ゆったりとヨガを楽しみませんか？
全員が初心者からのスタートです。
男女年齢問わずなので、どなたでもご参加ください。

開催日：毎月 奇数週の木曜日（第五がある月は開催します）
時間：午前十時半～十一時半
持ち物：ヨガマット・飲み物・動きやすい服
冥加志：お一人 八百円

★ニュース【news】★

◆六組聞法会◆

開催日：四月十四日（土）

時　間：午後二時～（受付一時半より）

会　場：光円寺（港区虎ノ門3の23の10）

講　師：梛野明仁（なぎのあきひと）師（岡崎教区　本澄寺住職）

内　容：ご法話＋聖徳太子伝絵絵解き説法

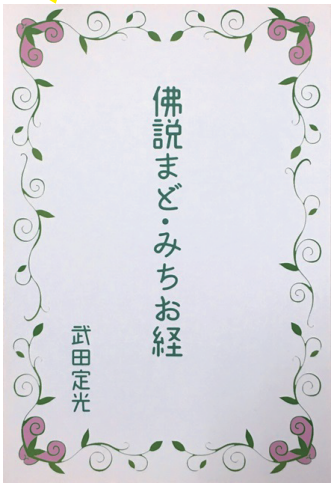
門徒・檀家で有る無し不問です

冥加志：お一人　千円

詳細は後日お知らせ致します。

住職新刊本発売

第二版発売開始!



『佛説まど・みちお経』

実費冥加金５００円程

「まどさんの表現は「○○教」とか「○○宗」を超越している。むしろ「○○教」や「○○宗」が、この世に発生してくる発生源を詩にされている。だから、「この表現はキリスト教の影響を受けている」などという必要がない。たとえ影響を受けていようがいまいが、そんなことはどちらでもよいことだ。ただ、まど・みちおの表現する〈ほんとう〉だけが、私に何かを訴えかけてくるのだ。」（本書【エピローグ】より）

【池袋親鸞講座】

―歎異抄のこころに学ぶ―

開催日：

第六回　三月　十四日（水）

第七回　四月　十八日（水）

第八回　五月　二十三日（水）

（全八回）一回千円

毎月一回　午後六時三〇分～八時三〇分まで

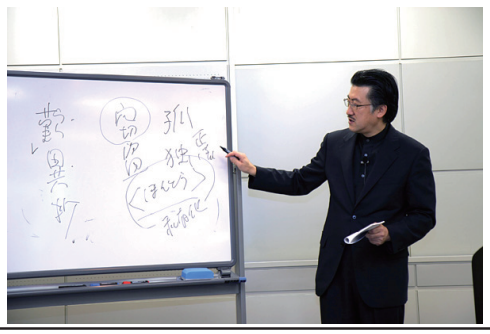
会場：ステーションコンファレンス池袋 Room1

（池袋メトロポリタンプラザビル12階）

交通：池袋駅（JR線・東京メトロ・東武東上線・西武池袋線）

メトロポリタン口から「メトロポリタンプラザビル」

オフィスエレベーターで12階へ



雑言雑語

▼今年は年明けから群発頭痛に悩まされた。欧米では自殺頭痛と呼ばれ、激痛に耐えきれずに自殺者がでるほどだ。発症して十二年目になるが、毎年ちゃんと季節の変わり目にやってくる。お朝事にも出られずにいたら父親から一通のメールが届いた。「災難にあう時節にはあうがよく候、これ災難をのがるる妙法なり（良寛）」と、激痛のさなか咄嗟に自分の中から湧き出た言葉は「何で俺だけ…」だった。裏を返せば自分以外は何の痛みも感じない無慈悲な私を頭痛は暴いたのかも知れない。「苦しみの只中に念仏の一声も出ず。」　定志

表紙画題

『赤色赤光（しゃくしきしゃっこう）』

武田美輪（坊守）

『よびごえ』一一八号
発行所　因速寺（真宗大谷派 本山 東本願寺）
〒136-0074 東京都江東区東砂1の4の10
TEL(03)3644-0986　FAX(03)3648-4391
Email　insokuji@at.wakwak.com
HP　http://park20.wakwak.com/~insokuji/
編集／発行　武田　定光　Takeda Jyoko
発行日二〇一八（平成三〇）年三月一日
Copyright 1990 INSOKU-JI Printed in Japan